



意識の転回

塩川 香世

**意識の転回を、どうぞ、始めてください。
肉からの脱却のために、これからがあることを
感じていってください。**

肉の生活の中に、しっかりと腰を下して、根を張るのではなく、ただ、自分の意識の世界をしっかりと見るために、今、それぞれの環境の中に肉体を携えていることを、知らなければなりません。

なぜ、生まれてきたのか、何をするために、この世に出てきたのか、その答えが自分の中で、はっきりとしてくるにつれて、自分が今、携わっている仕事、自分の家族、自分の健康のこと、その他自分の周りの事柄に対しての自分の思いが、変わっていくでしょう。

意識の転回

はじめに

あなたは、「意識の転回」という言葉を、耳にしたことがあるでしょうか。

そもそも、「意識」という言葉を、あなたは日常的に使っていますか。

「何かを意識する」とか、あるいは、「意識を変える」とかいうふうに、使われているかもしれません。

しかし、「意識の転回」という言葉は、どうでしょうか、なじみが薄いと思います。「意識の転回」とは何だろうか、初めて聞いたと

思われる方もあるでしょう。

私達が学んできたセミナーにおいて、「意識の転回」は「コペルニクス的転回」に例えられてきました。

太陽が地球の周りを回っているという考え方（天動説）と、地球が太陽の周りを回っているという考え方（地動説）とでは、全く違います。

このように、「意識の転回」とは、考え方の根本を一八〇度変える、転回をすることだと思ってください。

セミナーでは、肉を本物とする思いを天動説に見立て、意識を本物とする思いを地動説に見立てて、天動説から地動説への転回をするために、私達人間は、生まれてくることを伝えられてきました。

「人間の本当の喜びも幸せも、そして、人間という存在そのものも、『意識の転回』なくして、分らない。」

これが学びの中心部分でした。

ところで、「意識を本物とする思い」と一口に言っても、それは、いったいどういうことなのか、そう簡単には分らないと思います。今、現に、肉体という形を持つているのに、それが本物ではない、偽物だと思ふことは、無理というものです。

確かに世の中には、心が敏感で色々なことを感じる人はいます。

昔から、れいこん霊魂と通じ合うとか、れいばい霊媒とか、そういうことはあったようです。今は、さしずめ何とかのパワーでしょうか。とにかく、目に見えない世界、形がない世界のことを語ってきた人は、昔から存

在していました。だからといって、その人達が、意識の世界を本物だと思ってそうしてきたのかとさえ、そうでもなさそうです。それどころか、そういう人達ほど、実は危険なのです。

なぜか。

それは、まだ、自分の中で、「コペルニクスの転回」が始まっていないからです。自分の土台が、肉を本物とするところにあつて、その土台の上で、様々なことを感じ、やっているに過ぎないだけで、そうしているうちに、段々雲行きがおかしくなっていくからです。

雲行きがおかしくなるといふのは、たとえば、俗に言う敏感であつて、一般の人には見えないものが、その人には見えたり、聞こえないものが、その人には聞こえてきたりした時に、その処置を誤

れば、間違いなく、病院行きか、何か事件かトラブルを起こすだろうということです。

いいえ、それ以上に、大きな間違いを犯してしまうのです。何かを感じるがゆえに、人を導いていこう、救ってあげよう、私には大きな使命があるという大それた間違いを犯しやすいのです。みんな、形の世界を本物とする土台の上に立ちながら、形のない世界を知りたい、語っていききたいとしてきたからです。

それが己を掲げる思いであり、己を表す思いであることも分らないし、それらの思いが、どれほどの悪臭を放っているのか、その土台の上からは、分るはつきりありません。土台そのものが肉だからです。そして、その悪臭が、様々な現象を起こしていくのです。

話を元に戻します。セミナーが開催されて、二十年以上の年月を経てきました。しかし、その中心部分である「意識の転回」が、なかなかというのが現実です。それはなぜでしょうか。そして、なぜ、「意識の転回」がなされなければ、本当のことは分からないのでしょうか。

「私達の本質は、意識です。」

「誰も何も救うことはできない、自分を救うのは自分です。」

これは、セミナーで言い尽くされてきた文^{もん}言^{ごん}です。

同じようなことを、どこかで耳にされたり、目にされたりした人もあるかもしれません。

しかし、人間を形あるものとしてとらえた土台から発せられた言

葉と、人間は形ではないとする土台から発せられたそれとでは、語る文言は同じでも、その中身が全く違うことが分かるでしょうか。もんじん
そのことを含めて、「意識の転回」が、すべてのキーワードだということ、私なりに語ってみますので、少し、お時間をください。

(注1) セミナー

約二十年ほど前から、田池留吉氏という人を中心に、主おもに日本各地で、「私達人間は肉ではなく、意識です。永遠に存在するものです」というテーマで、セミナーが開かれてきました。

(注2) 肉

肉とは、目に見えて耳に聞こえて、形があるものすべてを指します。また、それらを本物として、それらを中心にしたところから出てくる様々な思いを、肉の思いと言います。

〔目次〕

はじめに 2

① 「意識の転回」は難しい?! 14

② 形の世界を本物とする土台 23

③ 自分の中の自分 36

④ 他力のエネルギーが染み付いています 47

⑤ 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、

今世はその手始めと思ってください 54

⑥ 間違いだらけの人生 59

⑦	自分にこよなく愛され、許されて、今がある	62
⑧	幸せを感じたいなら……	67
⑨	自分に聞いてください	71
⑩	自分とトコトン付き合ってください	77
⑪	生き様に優劣は付けられない	81
⑫	真の意味で、強い人間でないと、 真実を追究していくことなどできません	85
⑬	母を通して	90
⑭	握っているものを離すことが人生でした	100
⑮	あなたが欲しいものは何ですか	105

⑯ 苦しんできた自分のために、

どれだけ力を尽くしてきたか
109

⑰ 私と私の約束
115

⑱ 時が来たれば
122

⑲ 意識を転回すれば、もちろん、肉の心も成長します
125

⑳ 愚かな肉を携えて
129

まとめ
136

追伸
151

装丁／仁井谷伴子

意識の転回

①「意識の転回」は難しい?!

先ほど、「意識を変える」という言葉を挙げましたが、それは、一般的に、自分の思いを変える、考え方、ものの見方を変える、そういう意味合いで理解されているだろうと思います。

そうは言うものの、自分の思いを変える、考え方、ものの見方、価値基準を変えるところは、口で言うほど容易いものではない。むしろ、一時的に、何かしら、自分の中が変わったことを感じて、人間の心は、そう簡単には変わらないと考えるほうが妥当でしょう。もつと言えば、人の思い癖、心の癖は、そう簡単に変えることな

どできないということだと思えます。

喉元過ぎれば熱さを忘れるとか、または、元の木阿弥もとくあみという言葉にもあるように、思い癖とか心の癖は、なかなかしぶといものがあります。文字通り、「癖」ですから、ある時期を通り過ぎれば、また元に戻っていることのほうが、多いのではないのでしょうか。

さて、人間の心が、そう容易たやすく変わらないのと同様に、「意識の転回」というのも、大変難しいものだと考えてください。そして、ご推察通り、「意識の転回」というのは、ただ単に、「意識を変える」というものではありません。確かに、物事のとらえ方、見方、価値基準、判断基準を変えていくことに違いはありませんが、「はじめに」のところでも触れましたように、「意識の転回」とは、その基準

「意識の転回」は難しい?!

となる土台を変えることを言います。

いくら、見方、価値基準を変えても、土台が同じでは、それは、「意識の転回」とは、全く違うもの、全く別物なのです。

たとえば、九死に一生を得た体験から、人生観、世界観、価値観、それらのものが、自分の中で一変したと感ぜられても、果たして、それが「意識の転回」という次元のものになり得るかと言えば、私は、疑問だと思っています。もっとはっきりと言うならば、それは、「意識の転回」とは、程遠いものなのです。

九死に一生を得た体験、あるいは、目から鱗うろこが落ちるほどの体験というのは、今まで自分はこう思ってきたけれど、これからはこのように思っ生きていこうと、かなり大きな決意を、その人に促し

ていくものに違いありませんが、仮に、そういう体験、経験がある人であれば、今世、その人は何らかのルートで、今頃は、きっと、この学びに集われていると思います。学びに集われて、そして、それこそ、目から鱗^{うろこ}が落ちる体験をどんどん積み重ねられて、ぐんぐんと真実の世界のほうへ、心を向けていかれるようになっていないかと、私自身は思っています。しかし、残念ながら、ただそういう人には、出会っていません。

ということは、今、自分が体験した出来事により、たとえば、その人が目から鱗^{うろこ}が落ちたような感覚になって、さあ、ここから私の再出発だと思っけていても、私がお伝えしようとしているスタートとは違っているのだと思います。

「意識の転回」は難しい?!

一命に関わるような出来事に会って、九死に一生を得た命だから、生まれ変わった気持ちでやっていこう、頑張ろう、そういう人生における転機が訪れても、それが、果たして、「自分の土台を変えていくほどの衝撃を伴う転機」になり得るのかと言えば、なかなかそれは難しいと思います。もちろん、「この肉体は自分ではない」とする思いが、一直線に自分の中に入ってくるほどの衝撃というのは、そうざらにはありません。あるとするならば、それは、やはり、「人の生き死に」が、関わってくると思います。それも、単に自然消滅的なものではなくて、ある日突然に起こってくるものによって、もたらされる場合と例えば、察しが付くでしょうか。従って、「人の生き死に」以外では、目から鱗が落ちる体験が、自分の土台を変え

て、そこから自分をスタートさせることは、はっきり申し上げて難しいと、私は思っています。そして、スタートが違っていれば、あとは当然違ってくる。最初の第一歩を訂正することなしに、どれだけの時を重ねても、その結果は……ということになるでしょう。

自分自身は、目から鱗^{うろこ}が落ち、生まれ変わったと思っていても、土台が同じなら、五十歩百歩の世界だと、私は強調したいのです。とても、「意識の転回」とは程遠いものだと考えていただいていいと思います。

しかし、世間では、そういう話は、堂々と通じます。いえ、そういう話こそが、人々の共感を呼び、感動を巻き起こしていくのでしょう。

「意識の転回」は難しい?!

「心が洗われるようだ」「何とも感動いたしました」「清々すがすがしい思いに出会いました」「私は生きる勇気を頂きました」「大いなる励みになります」「私も頑張つていきます」

そのような様々な声も聞かれるでしょう。

その話の中に、形の世界を土台にして生きていれば、そうだと共鳴できることは多々あるとしても、土台が違う世界からは、決してそうはなりません。先ほど、五十歩百歩と言いましたが、みんなまとめて十把じゅうば一ひとからげです。ひとくりにまとめて、地獄へまっしぐら、それが現実だと私は思うのです。

二十年学んできても、難しいです。一口に二十年と言いますが、二十年は長い時間だと思いませんか。その間に、どれだけのセミ

ナーの回数を重ねてきたでしょうか。

日本全国、そしてアメリカ、韓国にまで、足を伸ばして、セミナーが開催されてきたのです。

もちろん、セミナーに参加された人達は、熱心に学ぼうと思つてこられたに違いありません。学ぶ動機やその他、様々な障害となるものがあつて、一足飛びにはなかなか進めなかつたことは事実だつたとしても、ここにしか真実はないことを、心のどこかで感じてこられたから、二十年続いてきたのだと思います。

それでも、なかなかという感があります。ましてや、学びをしていない人に至つては、こういうお話を耳にしても、全く素通りしてしまうのが実際のところだと思います。

「意識の転回」は難しい?!

私は、だから嘆いているわけではありません。まだまだ時間がかかることを承知で、しかし、私自身の心で感じていることは、決して揺るぎのないことだから、難しいのも分かりつつ、また、このようにパソコンのキーを叩きたくなるのです。

そこで、大変難しく、難行苦行ばかりを強調しても仕方がありませんので、たとえば、私という事例を挙げさせていただいて、この先のページを進めていききたいと思いますので、もう少し、お付き合いください。

② 形の世界を本物とする土台

「自分の土台とは何なのだろうか。」

「自分の土台を変えらるゝとは、どういふことなのか。」

学びを知らなければ、そのようなことを思ふことは、まずないでしょう。

しかし、ここで、あなたも一度、思つてみてください。

まず、その前に、土台というのは、次のふたつがあると考えてください。

ひとつは、目に見えて、耳に聞こえて、触れることができる形の

世界が土台となっている場合です。そして、もうひとつは、形は何もないけれど、心で感じることが出来る世界を土台としている場合です。

ほとんどすべての人が、今現在、形の世界を本物とする土台の上で生活を営んでいます。特段の意識をすることなく、目に見えて、耳に聞こえる形ある世界を、現実の世界だと思っています。その中で、夫婦や親子をやっています。また、会社の社長や政治家、その他様々な仕事に携わ^{たずさ}っている人、そうでない人と色々ありますが、みんな、形の世界を本物とする土台の上でやっています。

また、私達は、今、現に持っている顔形や身体的特徴から、他人^{ひと}と自分とを区別しています。私達には、それぞれに姓名が付けられ

ています。あの人とこの人は別人です。このように、人間を形ある世界から見る土台の上で、すべてが成り立っています。人間社会とは、そういうものです。

私達は、人間を形としてとらえ、いいえ、人間に限らず、自分の周りのものすべてを形の世界からとらえて、その中で、自分達の幸せと喜びを追求していこうとしてきましたし、今もそうです。

現代社会において、幸せと喜びを一番端的に表現するものが、お金ということになっています。この土台の最大の特徴は、金銭至上主義です。

人は、お金を手にすれば、万事うまくいくと思います。だから、お金のために、日々、争いは頻繁に起こり、それが、犯罪

や不祥事にまで発展していくことも珍しくありません。

また、主義主張を述べ、正論を唱え、奇麗事を言つても、最終的には、お金をよこせ、いくらくれる、どんな保障をしてくれると、裁判を起こしたりしています。

今はそのような世の中です。結局、すべての問題の中心はお金だと、そろそろみんな気付いておられるだろうと思います。だからといって、お金で何もかも解決するわけではないし、それが全面的にいいとも思っていないけれど、やはり、お金については、誰しもが関心があり、今の世の中において、決して、それを無視することはできないということでしょう。

いいえ、無視するどころか、お金こそすべて、金、金、金、お金

さえあれば何でも手に入れることができる、幸せになるにはお金が必要だと考えている人が、圧倒的に多いと思います。それが現代人、文明人ということでしょう。

もし、お金で買えないものがあるとすれば、真心だとか、人の情けだとかいうものでしょうか。しかし、それさえも、今に至っては危ないかもしれません。そこには、絶対にお金が動かないのでしょうか。

最初は、真心も純粹かもしれません。最初から騙だましてやろうという思いはなくても、段々に、お金がチラチラと見え隠れしてきたならば、その人達の結びつきは、どうなっていくのでしょうか。「札幌に自分の魂は売らない」なんて、カッコイイことを言っても、形を

本物とする土台の上では、それは難しいことなのではないかと思えます。それどころか、人との結びつきの中には、「金の切れ目が縁の切れ目」を堂々と地で行く場合も、多いと思います。

また、永遠の命も、お金で買えないものです。しかし、お金があれば、救える命があることも事実です。お金がある人は、高度な技術の治療を受けることができ、そうでない人はできない、そうなってくると、命の重みでさえも、金次第です。

形ある世界では、命を救うことや、命拾いをすることに、大きな意義があるようです。従って、命を助けることができなかつたりすること、どうしても暗く受け止めてしまう傾向にあります。

「命あつての物種」ものだねこの言葉、この思いこそが、形の世界を本物

とする土台を物語る極め付けだと思っています。

また、形を本物とする世界の、もうひとつの特徴として、戦争というものが永遠に続いていくことが、挙げられます。どんなに平和を望み、みんな仲良く豊かにと願い、話し合いの機会を持ち、解決策を模索しても、その土台の上では、戦いのエネルギーを消し去ることは、残念ながら不可能です。

ここで言う戦争というのは、何もミサイルや銃などで、一瞬のうちに人命を奪うという、いわゆる戦争だけを指しているわけではありません。そもそも、実際に人を殺すから、そこが戦場となっているのではなくて、戦いの場合は、人の心の中にあります。相手を非難、攻撃、破壊するエネルギーを、心の中からどんどん流す、それが、

戦うことを指します。

形を本物とする心の中は、絶えず戦いのエネルギーを流していると言っても言い過ぎではないはずです。

平等を唱えても、形の世界は不平等です。顔形から何から何までみんな同じということはあり得ない、形だから不ぞろい、色々あっていいのです。色々あって当たり前で、色々あるから、様々な思いが錯綜さくそうして、心の醜みにくさを感じていくことができるのですが、形を本物としていては、そのようにとらえることができません。

地位、名誉、財産のある人、ない人、元気な人、病弱な人、頭の回転がいい人、そうでない人、色々あって当たり前です。しかし、現実には、より幸せになろう、豊かになろう、輝かしき人生を送る

うという、その願望が強いのです。強いから、経済力が豊富で、切れ者で、しかも、健康が幸せの第一条件になるのです。

また一方では、生活空間が豊かになればなった分だけ、潤い^そが削^そがれていくを感じる人もあると思います。

そうすると、人々の欲望が集る都会生活から離れて、どこか田舎にでも引きこもって、自然とともに生活をすればいいのでしょうか。そのようなことをしても、戦^やうことを止めることはできません。殺伐とした中で生活をしようが、のどかな中で時を刻もうが、その人の心の世界の問題です。いずれは、それが形になって現れてくるのです。

人もまばらで穏やかな田舎でも、犯罪は起きます。隣に住む人

が誰か分からない都会も奇妙ですが、古い風習やしきたりが残っている田舎も閉鎖的で、案外、心が屈折しているのかもしれない。要するに、どこで生活を営んでも、心の闇の部分が噴き出してくるようになっていくのです。形を本物とする思いが、間違っているからです。間違いは、いずれ必ず正されます。

また、形あるものを、永遠にそのままの状態で保存しておくことはできません。形あるものは、いずれ、崩れ去り、消え去っていくのです。それは、形の世界が虚像の世界だということを、はっきりと指し示しているのではないのでしょうか。しかし、人は、虚像の世界にしがみつき、自分のすべてを費やしていく過ちを犯してきました。崩れ去り、消え去る虚像の世界に、刹那的せつなてきな栄耀栄華を求めて

いく人間の哀れさを感じずにはいられません。

ところで、人の心の中の戦いを一番分かりやすい形で示しているのが、今もどこかで武器弾薬が飛び交って、人があつけなく死んでいく生々しい現実です。そこでは、神の名のもとに正義を振りかざして、人殺しをしています。

何が、聖戦なのだと思いますが、しかし、それが今の人間の心の世界の実態だと、私は思っています。

国と国、民族と民族の争いから、夫婦喧嘩に至るものまで、人間は絶えず、戦いのエネルギーを流し続けています。

互いに主義主張があります。言い分、立場があります。

条件付きの譲歩で、何となく和解は成立したように見えても、中

はくすぶり続けています。和解したからといって、相手を攻撃するエネルギーは、消えて無くなったわけではありません。まだまだ、相手を攻撃するエネルギーが満ち溢れている中にあります。だから、どんなに幸せになろう、豊かになろうとしても、無理なことなのです。

それは、今、実際に世間で起こっている事件や事故などによっても、毎日、毎日、私達の目の前に、はっきりと示されています。

そろそろ、おかしい、何かおかしい、みんな狂っているのではないかと気付いてこられてもいいようなものです。しかし、形を中心に据えた土台は、まだまだこんなことくらいでは、崩れ去ることはないでしょう。それほど堅固な土台を、私達は築いてしまいまし

た。

それもその通りなのですが、揺るぎのない堅固な土台だと思う思
いもまた、本当は違っています。

だから、そのことを、これからの時間をかけて証明していく方向
に、しゆくしゆく粛々と流れていき、確実に、形を本物とする土台は崩れていく
のでしょうか。

③ 自分の中の自分

人間を形としてとらえてきた時間は、莫大ばくだいです。

従って、「いいえ、違います。私達人間の本当の姿は目に見えないものです」と、このようなことを、いくら言われても、それだけでは、誰も、おいそれとは、納得などしないし、できません。

ただ、そうであっても、人は、心の世界というものは、あるかもしれないと、思っているのではないのでしょうか。みんな、心の中では色々と思いが出てくるからです。今、現に何かを思っていることは感じていると思います。

そして、心とは、一般的に、目に見えないものだとして理解されています。その心の持ち主は、あなただと言われたら、それは、何となくそうだと思うでしょうし、否定はしないと思います。しかし、心の持ち主は自分であっても、その心そのものが自分であり、自分は心以外の何物でもないというところまでは、なかなか行き着かないのです。心と、自分がイコールで結びつかないのです。なぜならば、心は、目に見えないもの、自分は、目に見えるものだと思っているからです。

心というものはあるにはあるが、まずその前に自分があります。そして、自分というのは、たとえば身長がこのくらいで、体重はこのくらいというふうに、誰の目でも確認することができるものと

思っていますから、やはり、外側を気にします。人の目も気になるし、時流に乗り遅れてはいけないということで、情報収集、情報交換に、エネルギーを消費していきます。当然、それでは、自分の心というものが、外に向き続けます。常に、比較対照があつて忙しいのです。

自分の判断基準は、いつも外です。人の目を通して映る自分を見ってしまうのです。自分の目を通して自分を見ることをしません。それでは、自分の中の自分の存在など、知る由もありません。

だから、「心そのものがあなただ」と言われて、やはり、訳がわからなくなってしまう、「人間の本当の姿は目に見えない」と言われても、大抵、最初は何を言っていると鼻であしらつていくのだと思

います。

「反発する人や、無視する人はいても、「はい」と、すぐさま受けていく人は、おそらくいないでしょう。それが通常だと思います。それは、どなたの心の中も、たくさんの過去の自分の自分がひしめき合っている状態であって、そのたくさんの自分が、一様に、総すかんで食らわしている状態だと思っています。

その人が、何らかのきっかけで、学びを知っていつて、自分なりに学んでこられたならば、やがて時が経^たてば、「そうかもしれない」というふうになってくるかもしれません。しかし、「そうかもしれない」という思いが、「そうだ」となってくるには、それからまた、多くの時間を必要とするのだと思います。

たくさん過去の自分は、みんな、形の世界を本物とする土台を築き上げてきたのです。一生懸命に、我が帝国を築き上げてきたのです。

それに対して、「私達は意識です。私達はみんな同じです」というメッセージは、せっかく築き上げてきたと思っている帝国を崩壊させたいというものだから、それには、みんな、徹底抗戦の構えです。なぜならば、我が帝国が崩れるというのは、自分が崩れることになる、我一番の帝国が崩れることになるからです。

まず、そのような自分の中の自分と対面して、自分の状態、すなわち自分の今の実態を、心で知っていくことから、始めなければならぬのですが、すでに、長い時間をかけて、我が帝国を築いてし

まったので、今は、その中で、固まった状態です。

外から、コンコンと木槌きづちで叩いているようでは、埒らちが明きません。少し、ひびが入っても、すぐに修復しようとしませう。そういう点においては、機敏に反応していきます。我が帝国が崩れていくことを、最も怯おびえている証拠です。

そして、何も聞きたくない、私はこれでいい、この中がいいのだ、誰がここの主あるじを譲るものか、私は神、私は王だと、井の中の蛙を決め込んで、なかなか、その中から出てこようとはしません。

しかし、その塊かたまりが何かの拍子で溶け始めると、今度は、この世の常識とかそういったものは、完全に、度外視していきます。そういう人ほど、私は神だから、私は王だから、何を言っても何をやって

も許される、我に従えの思いが、奇妙な行動を起こしていきます。考えられないようなことを起こしていきます。常識のこちら側からは、全く説明がつかないような事態になってきます。というふうに、肉で固まった人が、何の準備もなく崩れ始めると、一言で言えば、狂った状態を露^{あらわ}にしてくるのです。

一方、それを見た人、聞いた人、関係した人の中に、それは、自分達の世界のことだと実感する人が、どのくらい、いるのでしょうか。その人達もまた、固まった状態ですから、「あの人と自分は」と、絶対に区別していきます。それはあの人の世界のことであり、私には関係がない、あの人と私が同じだなんて考えられない、と大体このようなところに落ち着きます。

確かに、「自分の心の中には、優しいところもあるが、その反面、悪魔か鬼のような部分もある」ということは、みんな、何となく分かっていると思います。しかし、まさか自分の中に、たくさんの自分というものを抱え持って、そして、今、自分は存在していると、はつきりと感じている人は、学びの中においても、まだまだ数が少ないのです。

過去世、過去世と言いながら、やはり、その中心にあるのは、今現在の形を持っている自分です。今現在の自分が、とても大切なのです。

ましてや、世間一般に、自分は色々な顔を持っていて、そのどれもが自分だと自覚している人があったとしても、大抵は、そのような

な鬼か蛇か悪魔のような心は、人知れず心の奥深くに留めておいて、外見そとみだけを取り繕とつていこうとするでしょう。別に特に善人ぶることとはないけれど、誰も好き好んで、自分の評判は落としたくはありません。やはり、いい人というか、気配り、配慮があつて、人当たりのいい人、物分りのいい人、そのような人でありたいと思います。そうやって、世間を渡すべつていく術だけを磨いていくのです。それが上手な人は、世渡りのうまい人となつて、結構、おもしろおかしく生活していけるのです。

しかし、本来は、そこに留まつていてはダメなのです。周りと無用なトラブルを起こすことはないけれど、鬼か蛇か悪魔じゃのような心は、しっかりと自分の中で確認しなければなりません。

世渡り上手にならなくても、自分の中の自分と上手に付き合つていく術^{すべ}を習得すればいいのです。そして、自分の中の自分を十分に確認したうえで、夫や妻や、親や子の役を演じていけばいいのだと思います。

自分の中の自分と上手に付き合う術^{すべ}を心得て、そして、それぞれの役を演じていることが、はつきりと自分の中で浮き彫りになってくれば、その人が醸^{かも}し出^だすものは、おそらく本当の意味で、いい人なのだと思います。変に媚^こびずに、素直で、優しい、自分の中の自分が自然体で出てきます。

鬼か蛇^{じゃ}か悪魔のような自分の中の自分も、温もりを通過して出てくるので、正真正銘のそれにはなりません。ということは、鬼か蛇^{じゃ}

か悪魔のような自分は、あえてトラブルを起こすようなことにはならないと思います。

また、夫だから、妻だから、親だから、子供だからと、ことさらに強調しなくても、相互扶助の中で生活していくことなど、簡単なことなのです。

自分の中のたくさんの自分を抑え込んで、自分は立派、私は正しいをいくらやってみても、所詮は井の中の蛙、ちっぽけな帝国の主あるじにしか過ぎない、なんてことを、私は常日頃感じています。

④ 他力のエネルギーが染み付いています

宗教が好きな人はもちろんですが、宗教を敬遠する人も、心に神を持っています。いわゆる宗教の世界を持っています。神や仏や、宇宙のパワーという表現だから、敬遠したり胡散臭（うさんくさ）そうにしたりするだけであって、そしてまた、普段、拝んだり祭ったり、祈ったりということがないだけで、心の拠（よ）り所（どころ）、心の支えとして、みんな何かを持っていると思います。

人は、大体において、心の拠（よ）り所（どころ）、心の支え、あるいは、慰（なぐさ）め、癒（い）し、そういうものとともに、日々の生活があると思います。それ

らが、自然に生活の中に溶け込んでいるのではないでしょうか。あまりにも、生活に密着しているので、そういうことは、宗教だとは思っていないかもしれません。たとえば、音楽などもそれに属すると思います。

また、生まれついた土地柄、場所においては、拝んだり祭ったり、祈ったりすることが、日常的になっているという人達においては、それを生活習慣としてとらえて、宗教だという感覚はないかもしれません。

どちらにしましても、人はみんな宗教の世界、いわゆる他力のエネルギーを心に秘めてきました。限らない転生の中で、他力のエネルギーを蓄えてきたのです。その人に自覚があるかないかだけで

あつて、みんな神、仏の世界を求めて、転生を繰り返してきたことは、事実です。

にもかかわらず、宗教の好きな人、興味がある人、反対に嫌う人が、実際にあるのはどうしてでしょうか。

確かに、神、神の子、意識の世界、波動の世界という表現は、どうしても非日常的なものに感じる人は多いでしょう。

目に見えない世界、心で感じる世界というのは、大抵の人達は、二の足を踏むのではないのでしょうか。一般的に、後ずさりするような感じを持たれる傾向にあるのではないのでしょうか。神や仏や宇宙のパワーを好む人も多いけれども、宗教の世界を、即座に敬遠される人も、また、多いかと思うのです。

私自身も、この学びのことを、耳で聞いていただけの時は、宗教だと思ってきました。だから、足を踏み入れることを拒絶してきたと言ってもいいと思います。拒絶するということは、それだけ神や仏や諸々のパワーを、過去において求めてきたからだだと、私は自分を振り返っています。

今現在の学びでは、意識の世界とか、波動の世界とか、そういうふうな表現になっているので、まだ入りやすいかもしれませんが、学びの最初の頃は、神とか神の子という表現をしていましたので、自分の中で距離があったことは確かでした。

ところで、宗教の世界に、のめり込む人、何らかの関心を示す人よりも、反対に無関心な人、あるいは無神論者だとする人のほうが、

他力のエネルギーが弱いのかと言えば、必ずしもそうではないと思います。

その人達もまた、自分達は、宗教とは無縁だ、そのような世界に入りたくないとかで拒絶しながら、実際は、祈りと願いのエネルギーがそれぞれの心から流れているのが現状です。

本当は、そういう人達こそ、日々の生活から、少し距離を置いて、自分を振り返る時間を持たれたらいいのではないかと思います。

案外、なぜ拒絶してきたかということを、心で感じてこられたら、今度は逆に、どんどん真実の方向へ、自分を誘^{いざな}っていかれるかもしれません。

ですが、現実には、大抵の人は、仕事、家事、子育て、学業、趣味、医

者通い等々、日々の生活に追われています。自分の生活パターンを変えることは、なかなか難しいです。

その中で、束つかの間の安まらぎや幸せを求めていくことに明け暮れていると思います。

第一、自分を振り返るという意味が分からないでしょう。たとえば振り返ってみても、生まれてから今日こんにちまでが、せいぜいだと思います。それで、何とか帳尻を合わせていこうとするだけなのです。他力のエネルギーをそのままにして、帳尻を合わせることなどできないけれど、染み付いてしまっているから、何とか、その瞬間瞬間を生きていこうとすることに、一生懸命なのだと思います。

今現在、占いや呪まじないや、その他、精神世界について興味がある人、

神の存在を信じ一生懸命祈りを捧げている人、いいえ、そういうものはどうでもよく、ただ金、金の生活に忙しい人、人様々ですが、その区別なく、誰もがみんな、他力のエネルギーの中に沈んでいると言っていると思います。

そのエネルギーを、本来の喜びのエネルギー、パワーに変えていくことが、私達のこれからしていくべき仕事です。染み付いてしまったエネルギーを、どのように変えていくのか、大きな課題を残しています。

⑤ 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れて
いきますが、今世はその手始めと思ってください

間違っているものが、いつまでも大手を振ってはられません。
最初は少しずつ、少しずつですが、ある時にドーンと崩れて、やが
て、その方向を変えていくか、あるいは、崩れたまま、深い闇の中
に沈み込んでいくかです。

まず、今世はその手始めだと考えていただいていると思います。
非常に大きな分岐点です。だから、少しずつ、間違いに気付いた人
から、自分の軌道修正に取り組んでいくようになっていきます。その

取り組み方法を、私達は、学んでまいりました。

長い間、間違い続けてきたことに気付けなかった私達に、今世、初めて、「真実はこうですよ、みんな間違ってきたのですよ」と伝えにきてくれた人がいました。

そして、私達も、自分の間違いに気付いて、今度こそやり直そうと決意して生まれてきたということは、確かなことです。堅固な土台を崩す作業には、最初は時間を要します。

間違い続けてきた意識の中で、今世の僅かな時間の間に、学び、すなわち真実が、広く流布ふすることは、はつきり申し上げて難しいです。私達の意識は、あまりにも、真実と遠くかけ離れてしまっているからです。

間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めとと思ってください

最初は要^{かなめ}作りです。しっかりとした中心棒が必要です。要^{かなめ}がぐらついているようでは、本当のことも、真つ直ぐに伝わっていきません。

手始めの今世には、まず、意識の目覚めがあつて、その中心部分を作るといふか、育てる時間が、必要でした。そのように準備を万全に整えて、そして、ドーンと崩れていく時を迎えるのです。

今世は中心部分を確実に作るという意味がありますから、広く流布^{るふ}する必要性はあまりないと、私自身は思っています。しかし、真実は、人から人へ、心臓が鼓動するように、伝わっていきます。

浅く広く流布^{るふ}していくこと、つまり、ただ単に、人を集めるのは、簡単かもしれません。いえ、簡単でしょう。欲心を刺激していけば、

また、興味心を突っつけば、何の造作もなく、人は集まってくるだろうし、もちろん、お金も吸い寄せることはできると思います。しかし、それでは、過去と同じ轍（わだち）を踏んでいくことになります。根本的な誤りを正さずに、つまり、「意識の転回」をせずに、目に見えない世界を求めていった結果、どうなっていたのかは、私の心はよく知っています。おそらく、過去に苦い経験が山ほどあり、人集め、金集めで、我が身を滅ぼす悲惨さをいやというほど、味わってきたのでしょうか。

今世は、大きな流れの分岐点です。私自身、今世は正念場だという思いを持って、この世に出てきました。

そして、過去の経験を教訓にしていかなければならないことを、

間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めと思ってください

ヒシヒシと感じてきました。

今は、あえて、そういうことをしなくても、間違いは必ず正される、時を待てばいいと感じています。

⑥ 間違いだらけの人生

「みんな、間違いだらけの人生を歩んできました。」

一言、このように発すれば、

「どこがどう間違っているのだ。」

肉、形を土台とする心が、一瞬にして反発してきます。

「私は、それなりに生きてきた」、あるいは「正しく生きてきた」、
もつと言う人は「立派に生きてきた」と、堂々と語るでしょう。そ
う思っている、また、そう語っている意識の世界は真つ暗だと、誰
が思うものでしょうか。

「確かに、間違いは山ほどしてきた、間違いだらけの人生だった、こんな私がここまでよく生かされたものだ。」

口でそう語り、また、本当にそうのように思っていたとしても、その人の土台が、肉、形の世界にあるならば、その土台の上で、ここは間違っていた、ここは正しかったと、判断しているに過ぎません。こんなにバカだった私がいながら、本当はバカだとも思っていないし、むしろ、よくここまでやってくることができたものだと、己というものをグツと前に突き出している波動を流されているのです。土台が肉であれば、それも当たり前のことです。

間違いだらけの人生というのは、そういうことではないのです。

肉、形の世界を土台としているその意識の世界が真つ暗な世界な

のです。だから、みんな間違いで、みんな真っ黒だと言っているのです。

「自分は肉」だと思っている意識、自分の本質を知らない意識は、みんな真っ黒です。真っ黒に正しくも正しくないありません。そのところが、なかなか理解できないのです。

⑦ 自分にこよなく愛され、許されて、今がある

「自分にこよなく愛され、許されて、今がある」ということも、実は、肉、形を土台とする心では、なかなか理解することはできません。

大抵は、「自分に愛され、許されている」ということを忘れ去って、自分でやってきた、自分の力でやってきた、生きてきた、頑張ってきたと思っと思っています。

中には、「私達は、許されているのですよ、生かされているのですよ、感謝、感謝です」という人もおられるようですが、「自分に」

愛されている、許されている、生かされているとは理解されていないでしょうし、「自分を生かすエネルギー」も知らないと思います。

結局は、その人達もまた、自分で生きてきた、自分の力でやってきた、頑張ってきたと語る人達と同類項なのです。世間では、自力と他力という言葉で、区別しているようですが、その両者は、根っこが同じなのです。

「自分に愛されている、許されている、生かされている」というところの「自分」を知らない心、「自分を生かすエネルギー」を信じない心が、いわゆる他力の心です。その他力の心が根っこにあるという同類項です。

人間は、自分を肉だと思い込んでいるから、当然、その肉の自分

自分にこよなく愛され、許されて、今がある

のために、努力して、頑張っていきます。

そして、肉の自分が幸せだと感じることや思うこと、嬉しい楽しいと感じることや思うことが、それがそっくりそのまま自分の幸せと喜びに繋がっていくことを信じています。信じているというよりも、それしか知らないのです。肉の心で感じる喜びとか、幸せとか、楽しさしか知らないのです。

では、他に喜びとか幸せとかがあるのかと言えば、あるのです。それも肉の心で感じるそれらとは、「月とすっぽん」ほどの違いがあります。

「本当の自分との出会い」、まさに、これが、その喜びと幸せの瞬間です。そして、その瞬間は、実は永遠に続いていくものです。こ

れほどの喜びも幸せもありません。

ただし、自分を肉だと思っいては、絶対に、本当の自分には出会えません。いえ、出会えないように、肉の自分が、前に出てしまっている、邪魔をしているだけなのです。

「本当の自分を知らないのだから、本当の幸せも喜びも味わうことはできない」、これこそ正論だと思います。

私達は、その邪魔をしている自分というものを知っていくために、「心を見る」という作業をしてまいりました。それでも、肉を土台とする根本を崩すことは難しく、そのため、心を見ることも、やはり、肉が土台になってしまうのです。どこまでいっても、どれだけやっても、土台が切り替わらない限りということになるのでしょう。

自分にこよなく愛され、許されて、今がある

しかし、それでもやり続けていく以外にないのです。それ以外に、自分を知っていく手立てはないからです。

⑧ 幸せを感じたいなら……

財力、権力、知力を手にしても、決して本当の世界とは巡り合えないことを、自ら気付いていかなければなりません。

それどころか、それらを手にすればするほど、全く逆方向に生きてしまう、本当の世界から遠ざかってしまうことにも、遅かれ早かれ気付いていかなければならないでしょう。

自らを地獄に突き落としてきた人類は、あまりにも愚かで悲しい生き物だったと、しみじみ思い及ぶことができた時に、反対に、肉を携えた人類ほど、幸せな存在はなかったと、また、つくづく思い

知ることができるのだと思います。

それは、一見、矛盾しているようですが、分かっしまえば、理路整然としています。

幸せを求めて、生きる喜びを求めて、日々頑張っていく人類が、なぜ自らを不幸にしてしまうのか、なぜ自ら破滅の道を選んでいくのか、誰にも解き明かせなかった疑問だったと思います。

「何が破滅なものか。私は、これだけ幸せだ。これだけのものを手に入れて、今、まさに、我が世の春を満喫している」。しかし、有体ありていに言えば、自分自身を知らないままで、生まれて死んでいく人に、我が世の春は嘘っぱちだと思います。

言葉ではなくて、その人から流れ出るものを感じていけば、それ

は歴然としています。

語る言葉からではなくて、その人そのものから醸^{かも}し出^だされるものが、その人を、一番適切に物語っています。

ところで、みんな、幸せになりたいから祈ってきたのでしょうか。

願いを込めてきたのでしょうか。そして、宇宙一になりたかった、宇宙を支配したかったから、戦い続けてきたのでしょうか。

結果、どうなのでしょうか。

心の底から、幸せだと言える人が、どれくらいいるのでしょうか。そしてまた、祈り続け、願いをかけて、そして、戦い抜いてきたという思いを、いったいどれくらいの方が、自分の心で実感しているのでしょうか。その実感もないままに、だからこそ、今もお祈

幸せを感じたいなら……

り続け、願い続け、戦い続けている中にあるということだと思います。

幸せを感じたいなら、祈りを止める^やことです。戦いを止める^やことです。しかし、やってみられたらお分かりになると思いますが、それは不可能なことです。

祈り続けるエネルギー、そして、戦い続けるエネルギーは自分自身であったと本当に気付くまで、祈りは続き、戦いは続いていくのです。

⑨ 自分に聞いてください

「世間で騒がれているニュースを^{さかな}肴に、一日一日を難なく過ごすことができる、万々歳ですか。」

「金、金の奴隷になって、ひたすらに金を求めていく一生で、満足なのでしょうか。」

「金もほどほどにある、〇〇も××もほどほどに整っている、幸せも中くらいかな、私はそれで幸せです、本当でしょうか。」

人はみんな、何かを求めて生きています。

自分を打ち込めるもの、自分を託すことができるもの、自分を賭

けることができるもの、自分を必要としてくれるもの、そういうものを知りたいとか、そういうものに出会いたいとか、その願望があるのではないでしょうか。それが具体的に何かは、今ひとつ分からずに、ずっと模索中の人も多いと思います。

それでは、何もかも忘れて、没頭できるもの、集中できるものに会っている人は、幸せだと思いますか。

家族のため、会社のため、社会のため、我が国のため、世界人類のため、しかし、肝心なものが抜けています。

自分のために生きようとする人、それも自分の中に生き続けているたくさんの方のために生きようとする人、そのために、今ここにこうして存在していることを認識している人は、殆ど皆無に近い

でしょう。

だから、世の中、狂って当たり前なのです。とても信じられないことが、ある日突然起こっても、本当は何の不思議もないのです。みんな根本を忘れ去ってしまっているからです。

何度も何度も、辛い苦しい目に遭って、何とか幸せになろう、なりたい、今度こそと生まれてきたことを、あなたは、どれだけその心で知っていますか。

今、悲しいことや、苦しいこと、辛いことがあるから、悲しい、苦しい、寂しい、辛いのではなくて、そのような思いは、自分の中に抱えきれないほど、すでにあったのです。今、降って湧いてきたものではなく、すでに自分が抱え持っていたものでした。

自分に聞いてください

悲しいとか苦しい、辛い、寂しいという思いは、人間、そういう目に遭ったら、当然ではないのかと思う感情だと思いますが、それで終わったら、そこまです。世間はそうです。「心を見る」ことをしなければ、そこ止まりです。それが人生なのだ、だから人生なのよと、なるだけです。

そのような思いとともに自分は生まれてきたのです。もともと、自分の中にあつたものでした。その思いと、どのように向き合っていけばいいのか、そこが最大のポイントだと思います。

思いの重圧に押しつぶされたり、そこから逃避するだけでは、そして、ただ悲しい、苦しい、寂しい、辛い、と訴えるばかりでは、その人は、自分の人生を生きていることにはなりません。

苦しくてもいい、辛くてもいい、寂しくても、砂を噛むような空しさに狂ってもいい、しかし、狂ったままではいけないのです。そこから、何を知っていくかです。そこから、どのように自分を見つめていくかです。そのために、自分に用意してきた時間が、肉の時間、すなわち、肉の人生です。

人生を生きるとは、自分を見つめていくことです。一生懸命、自分に報いてやれるエネルギーを、自分の中で掘り出していくことが、自分を幸せに喜びに、そして、安らぎに導いていくことだと、私は思います。

自分を自分で導いていく、導いていくことができる、そのパワーこそが、ずっと切望してきたパワーだったのではないか、私は、そ

う自分に問いかけてきました。

⑩ 自分とトコトン付き合ってください

「私とあなたは、深い縁えにしで結ばれている。」

そうかもしれません。あるいは、それは、単なる思い込みかもしれません。しかし、本当は、そのようなことはどうでもいいことです。深い縁えにしであろうとなかろうと、今、自分の身近にいることは確かです。その人達を通して、自分自身が何を知っていくのか、何に気付いていくのか、本当の世界を知り、本当の自分と出会うチャンスであるだけです。だから、ありがたい人達なのです。唯一、自分の世界を見ることが出来るチャンスを作ってくれている人達なので

す。それを、互いに、肉の土台の上で、肉と肉の繋がりとしてしか見ることができないのは、大変残念なことだと思います。

肉の時間は、どんな時も、自分（偽物の自分）の世界から、自分（本物の自分）自身を自由に解き放していくことができるか、そうではないかの、ふたつにひとつの時間でした。

どんな人生にも分かれ道、つまり、岐路があります。過去は、ずっと、その分かれ道において、後者をみんな選んできました。自由になりたいと願いながら、自分（本物の自分）を小さな枠の中に押し込めてきた、つまり、自分を肉だと思い続けてきたのです。私は自由だ、心は自由だと叫んでみても、自由の意味を履^はき違^{ちが}えてきたのでしょうか。

真実だけをどこまでも追究していく目は大変厳しいけれど、大変優しいのです。どの人の心の中にも、その目はあります。

その目を、真つ直ぐにとらえて、何をするために、この世に出てきたのか、はつきりと自分の中をさせることです。

仮に今、財を築いて名を残したい、自分の生きてきた足跡を残したい、それが自分の中から出てくる思いなら、私はそれもいいと思います。その思いにトコトン付き合って、自分の合点がいくまで、付き合っていけばいいのです。付き合っていって、本当に自分は愚かだったと心の底から気付いていけば、そこには、厳しくて優しい目があることに気付けます。

その目が、「真実の方向へ向きなさい」と伝えてくれていることに、

心から気付けます。

もし、私自身に、今もその思いがあるならば、私は、きっとその思いに従って、自分の持てるエネルギーをみんなつぎ込んでいくと思います。現に、私はそうしてきました。今世も途中までそうでしたし、もちろん過去においては、疑う余地ありません。自分の帝国を築きたかった、自分の宇宙を広げたかった、自分の幸せのために、自分の喜びのために、ずっと戦いのエネルギーの虜とりでした。

「行き着くところまで行かないと、絶対に分らない。」

「自分の心で分かなければ、どうすることもできない。」

それが実感としてあります。

⑪ 生き様に優劣は付けられない

性格がひねくれているとか、いじけているとか、言うこととすることが全く合っていないで、それなのにいつも偉そうにしているとか、そういう人種も確かにいます。この人、いったい何を考えているのかと言いたくなるような、人物評価をすれば、間違いなく落第点が付くと思われるような人もいます。逆に、素直で明るく、誰から也好人物だと合格点をもらう人もいます。

人間的に合格点が付いたからいい、落第点だからあの人はというのを、今、少し横に置いておいて、その人の土台というところに、

ポイントを置けば、どちらも、真実から遠くに離れているという共通点があります。

自分の今の肉体だけが自分であるという観点に立っていては、人物評価では合格点でも、真実の世界では合格点はもらえないことになります。もちろん、人物評価が落第点であれば、言うに及ばず、でしょう。

ところで、人物評価云々もそうですが、何を思い、どう生きていくか、言ってみれば、その人の生き様についても、優劣は付けられないと思います。その人が、真実を知らなかったならば、その生き様に優劣など付けることはできません。それは、みんな愚かだったと、それで片が付くからです。

しかし、実際にはどうでしょうか。

あの人は立派、何とかの鏡と崇めたり、反対に、人間のクズ、社会の掃き溜めと切り捨てていたり、色々な間違いを、私達は冒してきたと思うのです。

本来は、お手本となるような人もいなければ、バカにして見下す相手もまた存在しないのです。みんな、一様にして、愚かな自分を抱えているから生まれてきたのだと、本当に自分の心で感じていたならば、あの人は、どう、この人は、どう、そして、私はどうだなんて、言っている場合ではないことが、分ってきます。

全部、それぞれがそれぞれに定めてきた予定のコースを辿っていると感じてくれば、しっかりと見ていくのは、自分だけです。自分

の土台を見つめて、その土台を変えていこう、ただその思いだけで、生活をしていけばいいのだと分かってきます。そして、自分の土台は自分でしか変えられないことも分かってきます。

そう思える自分が幸せだとなってくるから、当然、その生き様は変わってきます。周りの影響はあまり受けないようになってきます。そして、今ある中で、自分を見つめていくことができる喜びが、その後の生き方に反映していくと思います。

生き様に優劣は付けられないというのは、肉の生き様に優劣は付けられないということで、本当のことが見え出したら、どのように生きていけばいいのかは、簡単に分かってくるし、それに沿った生き様は、すべてにおいて、「優」です。

⑫ 真の意味で、強い人間でないと、

真実を追究していくことなどできません

強い人間というのは、自分の本質が何であるのか、そのところから目を離さずに、信じて、信じて、信じ切っていくとする思いが、心の中から、マグマのように湧き出てくるまで、自分と真向かいになれる人を言います。豪傑ごうけつということではありません。

一方、弱い人間というのは、単に気が弱いとか、気は弱いけれど優しいとか、そういうことではなくて、自分自身を信じ切ることができない人を指します。自分を自分で見限る冷酷さが、弱い人間に

真の意味で、強い人間でないと、
真実を追究していくことなどできません

は分からないのです。

気が弱いから、ダメだ、ダメだと落ち込んでいくのではなくて、自分を信じ切る信が弱くて、自分に冷酷無慈悲だから、ダメだ、ダメだと、自ら地獄の中に落ちていくことを選ぶのです。

優しさは厳しさです。厳しさは愛です。自分に対する絶大なる信頼のもとに、愛が育はぐまれていくのだと思います。

自分に対する絶大なる信頼、その絆を深めていくことが、これからさらに望まれることだと、私は理解しています。

自分を見つめるために、肉を持ちました。肉は絶対に必要でした。肉を掲げるために、肉を使うのではなくて、自分を見つめるために、肉を使う、自分を見つめるために、肉が必要だった、そのことに気

が付けばいいだけです。

もちろん、肉を維持するために、社会の色々なことに対応していかなければなりません。今は、そういう社会になっているからです。しかし、自分の中で、肉がなぜあるのかという目覚めがあれば、肉の維持のために必要なものは、すべて、肉のもとに、届けられるようになっていくことが、感じられます。手許にあるもので、自分を見つめていけるようになっていくことを、しみじみと感じて、満たされていることを知るから、肉も安泰です。肉の心も安泰なのです。足らないもの、ないものを欲しい欲しいと求める思いが、段々と薄れていけば、逆に、すでにこんなに満たされていることを感じます。肉のために、肉の中で、肉として、生きようとするから、ないもの、

真の意味で、強い人間でないと、
真実を追究していくことなどできません

足らないものばかりに思いが向きます。あっても、あっても不足の思いが募る、ということとは、苦しみはありません。

自分（意識）のために、今、肉を持つていることが自覚できれば、今、肉というものが必要なのだから、手元^{てもと}不如意^{によい}などという事態は起こってこないと感じます。それは、単に、経済的なものだけではなくて、すべてにおいてそうだと感じます。

必要なものは、自分の周りに配置していきます。自分を見つめるのに必要なものは、すべて揃えていくのだと思います。なぜならば、人は、自分（意識）のために、肉という形を持つからです。意識の流れの中にある自分を振り返れば、それは納得です。なぜ、こういうふうになっていくのか、答えは簡単だったのです。自分が全部計

画してきたに過ぎないことが、分かります。

「越えられないものはない。」

実感として分かってくるのではないでしょうか。そう感じれば、勇気百倍です。偽物の自分ではなくて、本物の自分を信じていこう、喜びとともに勇気が湧いて出てくると思います。

「これが、私が私に目覚めるのに必要なことだった。」

そのように本当に思えたならば、その人は、きつと幸せです。自分に自分がありがとうと言える、こんな幸せな時間は、今までになかったはずです。

真の意味で、強い人間でないと、
真実を追究していくことなどできません

⑬ 母を通して

さて、私という事例を挙げて話を進めることにしていますので、まず、私は、母を語ってみることにします。

私は母が苦手でした。苦手と言っても、私を産んでくれた母親を嫌ってきたということとは、少し意味合いが違います。

母は、世間の常識からすれば、まず合格点の母親だと思います。

決して、不良な母親ではありません。私には、母を嫌う理由がありませんでした。母から、特に不都合なことを受けた覚えはありません。たとえば、家族を顧みないで自分勝手な行動をする、いわゆる

自己中心的な母親のとぼっちりを受けてきたとか、今よくある虐待を受けたとかは、一切なかったし、特に教育ママでも放任主義でもなかったのも、母親に対して、不平不満があつたわけでもありませんでした。

しかし、私は、母が苦手でした。母の目が苦手だった、母の目を嫌つてきたと言つたほうが、正解かもしれません。

母が苦手だったというのは、肉の母が何かを言つたから、何かをしたからに起因することではなく、あくまでも私の側^{がわ}の問題でした。

私は、自分と母との間に、部厚い壁があるのを感じていました。いつも、私は、「母は、目で私を支配している」と、思つてきました。そして、その目と出会うたびに、「私は、あんたとは違う」と、私の心

は返していたのです。私は、母の領域に組み込まれることを、極端に嫌い、避けてきました。特にどうかという母親ではないのに、なぜ、このような思いになるのかが、私には全く分かりませんでした。

そして、時を経て、母が苦手だった私が、「母に使ってきた思いを見なさい、母を思っでござん」という学びの門を叩くようになりました。いえ、叩かざるを得ない状況に、自らを追い込んでいったのです。そして、学びの門を叩き、自分なりに学ばせていただく中において、自分の中の態勢が整えられていたことを、私自身の心で知るようになりました。

それは、母が苦手だった私が、その母と向き合って、自分を見せてもらおう、私を産んでくれた母を丸ごと、そう、その意識も肉

も、みんな自分の心で全面的に受け入れていこう、ようやく、そのように思える私になっていったということでした。叩かざるを得ない状況に、自らを追い込んでいったことは、そういうことだったと納得しました。

だから、学びの過程において、母に向けて、そして、周りの人達に向けて、自分の出す思いがどれだけすさまじかったかということを確認できても、私は、それで落ち込むということは、ただの一度もありませんでした。落ち込むどころか、さもありなんと、心に上がってくるものは、納得と喜びだけでした。すさまじい思いと出会うことが、喜びであり、そのために、肉の時間を用意してきたことを、はつきりと知るようになったからです。

私を産んでくれた母親に対しては、思いがストレートに出ます。

母親の反省の初期段階で、ノートに書きなぐった思いは、どれもこれもみんな自分を中心に据えての思いばかりでした。母親は、何々してくれて当たり前の人でした。だから、してくれたことよりも、してくれなかったことに対しての思いだけが、膨大に膨らんでいきました。それは、まさに、私が、他力の神々に対して使ってきた思いと、何ら変わるところはないと実感してきました。

ノートに書きなぐった思いは、やがて、自分の肉体を通して、エネルギーとして表現されていきました。

口から出る言葉は、「死ね、死ね」の連続で、どこまで、この「死ね」が続いていくのかと思うほどでした。

私は、母を通して、自分の中に溜め込んできたエネルギーを、存分に感じさせていたのだのです。それで確認できたことは、私を産んでくれた肉の母親は、私自身が心に溜め込んできたものとは、何の関係もなかったということでした。

「母が何かを言ったから、何かをしたからではなかった。」

「母に思いをぶつけても仕方がなかった。」

「母の目が厳しいのではなくて、その目を見る私の思いが素直ではなかった。」

母を疎ましく思う自分が違っていました。

そして、自分を知っていくために、親と子の縁を結ばせていただいた事実と、私を産んでくれた、私に肉という形をくれたという事

実だけが、最終的に、大きく私の中に広がっていきました。さらに、自分のエネルギーを感じていけばいくほどに、それらの事実が、どうしようもなく、ありがたいものになっていきました。

母と子、私達の肉の関係は確かにそうです。母と私は血が繋がっています。血の繋がりよりも、もっと強い繋がりのあるのかどうなのか、定かではありません。

私が、ここで言いたいのは、繋がりが強いからどうということではなくて、本当に意識の世界を感じてくれば、その繋がりの中で、人としてのやるべきことは、きちんとするという方向に、肉も、自然になっていくことを感じるということです。

ただ単なる親と子の扶養関係から、私は、老いていく母親を看^みて

いくではありません。それは、肉としての最低のルールであると同時に、やはり、意識の世界の真実を知った喜びによって、自然に肉はそうようになっていくのだと思います。

ところで、昨今のニュースを見聞きしていて、私が一番やるせない思いを感じるのは、その最低のルールも守られないことです。なぜ、年端もいかない我が子を邪険にするのか、反対に、年齢を重ねて思慮分別もあるのに、なぜ、自分の年老いた親を邪険にするのか、その他、肉では、理解できない部分も多々あります。もちろん、私は、そのようなことは、今世だけの繋がりつながりの親とか子とか、夫とか妻だけでなく、ずっと過去から引きずっているものがあつて、様々な惨たらしい事件が起きているということは、百も承知しています。

そういう繋がりの中から、その人達は、自分を見ていくに過ぎない
ということも、承知しています。

そのような心の闇がボンボンと噴き出してくる時を迎えているこ
とを、きちんと自分の中で把握できない限り、またもや、心の闇に
振り回されて、肉のドロドロとした中に、自分を沈めていく結果と
なっていくことは、様々な事件を通して、はっきりと示されていま
す。それは分かっている、何で、我が子を虐待できるのか、殺す
ことができるのか、その他のこともそうです、何で、そんなことが
できるのかと、それらのニュースに接するたびに、何か悲しい気が
します。

今は、自分のエゴと欲と無知で、我が子を虐待したり、殺す母親

が続出する時代となり、また、自分を産んで育ててくれた親を、邪険にしたり、死に追いやっていく時代となってしまう。親子だけではなくて、夫婦でも友達でも、気に入らなければ、簡単に殺すし、面識のない人達にさえ、危害を加え、平然としています。

お金に狂い、欲にまみれた中で、犠牲となっていく命を思う時、ここまで、人の心は失墜しているのかと感じざるを得ません。

もちろん、殺されたり邪険にされたりするには、されるだけの理由があります。加害者だけが責められるものではない、そこには、因果関係があることは確かです。

しかし、今は、あまりにもその手口が残忍です。そういう意味で、心に巢食っている闇の深さを、感じています。

⑭ 握っているものを離すことが人生でした

意識の転回が進んでくると、それが自分の中で始まらない限り、どれだけ肉の時間を重ねていっても、真実に辿り着くことができないことが、はつきりと分かってきます。

そして、時間をかけ、積み重ねた形を本物とする世界は、一瞬にして消え去っていく陽炎かげろうに過ぎなかったことも感じます。

それらを心ではつきりと知るから、自分の中から、ひとつ、ひとつ、握っているものを離すことをやっていこうとするのでしょう。

「幸せや喜びは、しっかりと握っていないければ、私の中から消え

去っていく。」

「私を幸せに喜びに導いてくれるから、絶対この手を離すものか。」

「離させようとするものを、徹底的に排除していく。」

「この手の中に確実に入れるものが多ければ多いほど、幸せ感も厚くなるし、喜びも大きくなる。」

大真面目にそう思っていました。大きな思い違いをやってきました。もちろん、そこで、手にしようとするものは、楽しいこと、綺麗なこと、嬉しいこと、輝いているものばかりです。汚くて、暗くて、無様なものは、なるべく自分から遠ざけようとしてきましたから、その心の状態は、本当にお粗末なものだったと、今なら分かり

ます。そのような心の状態で、人生を頑張って生きても、幸せになるはずがなかったのです。

今は、心がつかんでいるもの、握っているもの、それが少なければ少ないほど、そして、緩ければ緩いほど、本物が見えてくることを知りました。

本物が見えてきたならば、握ってきた自分、つかんできた自分が愚かだった、それだけでした。

そして、自分が愚かだったと気付けば、本物は、握ろう、つかもうとしなくても、すでに、そこにあつたのです。

偽物を離せば、本物が自然に見えてくるのです。そして、偽物（形の世界）も、きちんと整っているのです。整えようとしなくても、

自分にとって必要ならば、整ってきます。

また、本当の自分の世界を感じていけば、きちんと整えられた形の世界でさえも、自分にとって必要がない時がくれば、そこから心を離していくことができるのだと思います。

形が崩れたから、仕方なく心を残して離すのではなくて、形が整えられていても、ずっと心は離すことができる、それは、本物を感じてこそできるのだと思います。形は形にしか過ぎないことを、はつきりと心で知るからでしょう。

本来、正しい軌道にある人は、にっちにち日日の生活をしながら、つかんだ手を緩める、離すことを学んできます。

自分の世界と向き合うことができるということが、どれだけの幸

せであり、喜びである今なのかを感じていけば、お粗末な心の状態も、また、よかったなあとなくなってくるのでしよう。

いいえ、お粗末な自分だったからこそ、本当の幸せや喜びを感じてくれば、すごい世界に自分はあることを、しみじみ知っていくと思います。お粗末な自分に、ありがとうしかないことが、実感できます。

⑮ あなたが欲しいものは何ですか

幸せも喜びも、私自身が求めてきたものは、みんな間違っていたことは、今は、はっきりしています。やはり、そうでした。みんな間違ってきたというところからスタートすれば、何もかも自分の中で符合してくるのです。しかし、前にも述べたように、土台が肉であれば、そのスタートの位置自体が分かりません。みんな、間違っていたことが、なかなか分からないというか、認めることはできないのです。認めることができれば、スタートは切れません。

しかし、大概の人は、自分自身は、とつくにスタートをしたと

思っています。もう今は、随分遠いところまでやってきただろう、これだけ一生懸命してきたのだから、どれだけ立派になったかと振り返ってみて、まだ全くスタートしていなかったことを知って、愕然とする時があるかもしれません。そして、その時はもう遅かりし、人生の終焉の時かもしれません。

一生懸命やってきたはずだったのに、実際は、足踏み状態、または、前進するどころか後退している状態である、ということ、心で知れば、自分を足踏みさせるもの、後退させるものばかりを握って、この肉を置いていく人生は空しいと、感じずにはいられないでしょう。しかし、それならまだいいほうかもしれません。

どんなに華やかで煌びやかな輝きを発していても、所詮、その輝

きは、すぐにくすんでしまうことを、心で知ることなしに逝^いつてしまふことほど、空しいものはないと思います。

さて、あなたが欲してきたものを、今、あなた自身、その手に収めることができますか。

私は、できています。それは、完結する世界のことではないのですが、私は、私が探し求めてきたものに出会いました。本当のことに出会いました。

学びの中において、アルバートの世界、田池留吉の世界、母なる宇宙と、呼称は色々ありますが、たったひとつの真実の世界があった、これだけが唯一の現実であり、本当のことでした。

たまらない空しさと寂しさの中に落ちてきた私だけど、私は、今、

あなたが欲しいものは何ですか

肉を持ちながら、意識の流れがあること、真実の世界に存在している自分であることが確信できたから、やはり、私は幸せ者だということになると思います。

⑩ 苦しんできた自分のために、

どれだけ力を尽くしてきたか

「苦しんできた自分のために、どれだけ力を尽くしてきたか」と尋ねられて、返答ができますか。

「あなたが力を尽くし、エネルギーを注いできたのは、全部偽物の自分のためではないのですか」と言われたならば、どうでしょうか。

「苦しんできた自分とは、何か。偽物の自分だと言われても、どこがどう偽物なのだ、私には分からない。」

「あなたの言うことは私には理解できない。それは、私だけでは

苦しんできた自分のために、
どれだけ力を尽くしてきたか

ないはずだ。私の周りの誰に聞いても、こんなこと、理解できるはずがない。」

「確かに、金だけで幸せになれるはずがないが、しかし、金がなければ、一日だって生きてはいけないではないか。」

「病弱な身体^{からだ}で、いったい何ができるのか。」

「知能に障害があったり、常軌^{じょうぎ}を逸^{いっ}した精神状態だったりでは、まともな社会生活を送れるはずがない。お気の毒だが、それも運命と諦めてもらうより仕方がない。私は、お陰さまで、五体満足の身体^{からだ}に恵まれた。とにかく、一生懸命、自分が正しいと思っていることをやるまでだ。」

「私の人生だ、だから、勝手気ままに生きてやる。誰にも何も言

わせはしない。」

様々な思いが伝わってきます。

すべて、肉体を自分だとしている思いです。常日頃から慣れ親しんできた思いだから、ほとんど合点がいくでしょう。

土台である自分（肉）の喜びと幸せと繁栄を求めていくのは、人（肉）として当たり前です。誰も、苦しみたくはありません。

ところで、「自分のために生きる」「自分のために自分の持てるものを使っていく」とは、どういうことだと思われませんか。

実は、その基本姿勢が私の中で、変わらずにありました。

「自分が自分に与えた人生は、自分が納得するように生きていく。」

苦しんできた自分のために、
どれだけ力を尽くしてきたか

その思いも強くありました。そして、その方向が、肉から意識へ土台を変えたからこそ、今や絶対に間違っていないことを確信しています。

土台が変わらなければ、いくら自分のために生きていきたいと思ってみても、それはエゴの中のことに過ぎないでしょう。ただし、エゴの中かもしれませんが、自分のために生きていきたいという思いは、私の中で、ほぼ純粹だっただと思っています。その純粹な思いが、今の私を導いてきたと、私は解釈しています。

私は、絶えず、いつも何かを探していました。自分に納得する何かを探していました。この世の常識にとらわれることなく、私が私にしてやりたいことを、探し続けてきたから、よかったと思います。

もちろん、私は何も変わった生活をしてきたものではありません。

ごく普通に日々を営んでいます。しかし、今思えば、私の幸せや喜びの価値基準は、初めから、常識から逸脱していたと思います。社会の中で、家族の中で、それらを追求していく限界を、私は感じてきたのです。

それらには限界があつたのです。行き止まりを感じてきました。

どうしても、自分を満たすものが欠けていると感じるのです。では、どうすればよかったのか、何があればいいのか、ということは、なかなか分かりませんでした。

言うまでもなく、人と人との繋がりの中で、生活は成り立っています。人は、ひとりでは生きていけないでしょう。しかし、私はひ

苦しんできた自分のために、
どれだけ力を尽くしてきたか

とりなのです。自分の世界を追求していきたい、していこうという
思いが、底に根強く根深くあり、それが今ようやく、表面に顔を出
し、その姿を克明に現してきたことを感じている日々です。

今は、肉の中に、私の求めているものはない、私の中で、その思
いが確立していると言っても言い過ぎではないと思います。

⑪ 私と私の約束

心の中にある遺伝分子は、肉を持つことにより、動きが活発化してきますが、その成長は、もうありません。肥大することはなく、終息の時期に入っています。

それが、私の来世、二五〇年後の肉の環境だと思っています。

肉の繋がりをごく最小にして、今世よりもさらにもっと最短距離で、真実を自分の中で広げていくだろうと思います。

今世の予習を踏まえているから、自分の中に、一直線で核心に迫ることができるのだと思います。

今、自分を振り返るにあたり、私の環境が、真実を追究していくのに、申し分のないものだったことを実感しています。

その中に、私が学びに集ったタイミングというものがあります。

これは、私にとっては、非常に大きなポイントでした。早くもなし遅くもなし、丁度いい時期に学ばせていただいたことに感謝です。

それから、自分なりに試行錯誤しながら学んできた結果、自己確立の道を確認かなものとして、今は、その自己確立の障害となるべきものは何も無い環境を設定しています。

ゆっくりと、ゆったりと、二五〇年後に思いを馳せながら、楽しみながら、喜びながら、我が行く末を見つめていく時間、空間に恵まれています。

これほどの幸せはないと思います。

己という肉を顕示していく次元は、過去のものになりました。そのような次元からは、到底真実の世界を知っていくことなどできないことを、感じているからです。

私には、そのような次元で道草を食っている時間はないことを感じます。

ひたすら、自分の中で対話を続け、そして、より純粋な世界を自分の中で広げていくことが、私と私の約束です。

もう、自分を裏切ることはありません。大いなる優しさ、温もり、広がり、そのような自分であったことを知りました。

私は、流れています。絶えず、新鮮な空気を送り込んでくれる自

分を感じ、本当にこの私とともに存在していくことの喜びを、実感します。

私を感じている世界からすれば、形の世界の様々なことが、本当に芥子粒けしつぶのように感じます。だから、その中にありながら、芥子粒けしつぶには左右されません。いずれ消え去るものであり、永遠のものではないものに、もう二度と自分を売ることはしません。そして、芥子粒けしつぶの中だと知っているから、どんなにすごい思いを確認しても、私はびくともしないのでしょうか。揺れながら、振動を吸収しながら、よかった、嬉しい、ありがとうと、芥子粒けしつぶを包んであげる私が、最終的にあります。

しかし、肉は駆け引きもしているようだし、損得も考えているよ

うです。一応、そうですが、やはり、それもまたどこかで、パッと立ち消えになっていくように思います。そのような肉は愚かですが、今はとても愛しく思えます。

私は、一生懸命生きようと、もがいてきた愚かさを、充分に味わってまいりました。もう私は充分です。もがけばもがくほどに、欲すれば欲するほどに、底なし沼に沈んでいくことを知りました。

「底なし沼の恐怖や苦痛は、どれもこれも自分をそこから解き放すためにあった。」

「自分を苦しめているのは底なし沼ではなかった。」

「自ら進んで底なし沼にはまっていたことが苦しみだった、それが肉の転生に他ならない。」

そういつたことを、私の心の世界は、きちんと、とらえていると思います。

形の世界は、区別差別の世界です。知力、財力の違い、容姿の美醜^{びしゅう}、それらがあるから、肉としての汚いドロドロを、まざまざと見ることが出来ます。そういうふう^{すべ}に、物事をとらえる目を養っていく術を、今世の私は会得したのだと思います。

もちろん、二五〇年後に、肉を持てば、私は、区別差別の肉の世界で、ある時期は苦しみます。その苦しみの種は、まだ私の中にあるからです。しかし、それが肥大化することは、もうありません。間違った方向で物事をとらえる目は、ある瞬間に変化する、その体験を経て、私は、ただ一直線に進んでいきます。それが、意識の転

回がなせる業わざなのだと、
私自身感じています。

⑱ 時が来たれば

時が来たれば、予定通り、筋書き通りに反応して、事は遂行されていきます。意識の流れとはそういうものです。その流れに逆流するのは、肉を本物とする思いです。その意識は流れに乗ることはありません。流れに乗ることはないということは、沈み込んでいくだけです。再び浮上することは、さあ、どうでしょうか。

と言って、どこか違う世界にあるのではなくて、いつも同じ世界にいます。肉を本物とする側からは、こちらの世界が分らないだけ、ともにあることが分からないだけです。

肉を本物とする思いは、自らがその間違いに気付く、その思いを、意識を本物とする思いに転回する必要があります。

「形を通して、自らの苦しみ、間違いを見る、感じる、そこから、自分を解き放していく」、そういうことをしていくのが人生でした。生きていく意味も、何もかも全く違っていた、全くトンチンカンな方向で、幸せと喜びと安楽を得ようとしていた自分に気付くはずです。

気付けば、ただ嬉しくなってくるのです。喜びが、尽きることなく溢れていることを感じます。

意識の流れは、淡々と流れていきます。すべてをその中に受け入れて、流れていきます。流れにそぐわないものは、自然淘汰しぜんとうたされて

いくのです。

肉を本物とする思いは、沈み込んでいき、浮上することは難しいという表現は、頭でとらえれば、曲解されるかもしれませんが、まさにその通りなのです。

⑪ 意識を転回すれば、

もちろん、肉の心も成長します

意識の転回をすれば、何が分かるのか、意識の転回をし始めてこそ、本当の喜びと幸せが分かります。

その過程では、ただただ真つ黒な自分だけが飛び出てきます。その作業が進むにつれて、真つ黒な自分がたまらなく嬉しい、愛しいということに尽きるのです。

自分は素晴らしい、私は正しい、間違っていない、悪いのはあいつだ、こいつだ、世の中だと思っている自分を見てみれば、すべて

を八つ裂きになっているエネルギーの塊であることを感じていくでしょう。八つ裂きという表現はどうでもよく、とにかくすごい、さまざまなエネルギーです。

正しい、間違っていない、私は偉い。本当に正しくて間違っていないくて、偉いのでしょうか。これからは、その答えとなるものが、どんどん自分に訴えてきて、自分を変える方向に行かざるを得ない状態になっていくのだと思います。

形の上で、色々なことが起こってくるから、人は何かを考え、何かを思い、そして、自分の来し方、行く末を思います。それが、本来の人間の姿だと思います。それで、根本的な間違いに気付くことは難しいけれども、少なくとも、愚かな自分を感じる時がやってく

と思います。人智が及ばない大きな流れを、それぞれの心が感じていった時に、人は必ず変わっていきます。私は、そのことが信じられるのです。

さて、私自身は、本当のことは何かとか、自分という存在の幸せに気付けたから、肉の心は、まだまだお粗末で、課題もたくさんありますが、お粗末ながらも、肉の心もまた成長をしていると、思っています。

誠を尽くしたい、肉の母に、そう思います。

単に世間で言う親孝行ではありません。真実に触れた意識としての喜びを、形に表していこう、いききたいとする思いになっています。そしてそれが、肉が思う誠を尽くしたいという思いに繋がっていく

意識の転回をすれば、もちろん、肉の心も成長します

ように思います。

肉の母親は、私に肉をくれました。この世に産み落としてくれました。肉の母親は、愚かかもしれません。いいえ、愚かでしょう。それは、私も同様です。しかし、私には、私に肉をくれたという事実だけがあります。

その事実の重みを感じながら、日々の生活が続けていくことが、私をさらに成長させるものだ、私は思っています。

「肉と付き合いながら、肉の部分を小さくしていく」、このような計らいを自分のために用意して、そして、本当に自分自身が知りたかった世界と、繋がっていくことができる喜びを、私は間近に感じています。

②0 愚かな肉を携えて^{たずさ}

私は、口八丁、手八丁の類^{たぐい}の人間ではありません。

優しい言葉をかけ、優しい態度を示し、互いに頑張っていこうと声を掛け合う人は、とっつきやすいかもしれません。私は、どうもそういうことは苦手だから、とっつきにくいみたいです。以前から、「あなたの考えていることが、私にはあまり分らない」と、母に言われてきました。

私は、面倒見はよくないし、逆に人から口を挟^{はさ}まれることも、あまり好みません。生真面目でもなく、几帳面でもない、邪魔くさが

りで、面倒なことは嫌いです。多分に自己中心的なところがあります。肉としては、あまり上等ではありません。

また、私は、どちらかと言えば、一匹狼に近いと自分自身を評価しています。それだけに、ひとつ間違うと、地獄の奥底に転落です。あまり人の言うことを聞かないからです。自分で納得しない限り、聞いているようで聞いていない、調子を合わせているようで、そうでない、そのような肉の癖を持っています。

しかし、この肉の癖が、案外、学びを遂行していくという点において、プラスに作用したと思っています。

一見、短所なところも長所に作用していったのは、やはり、自分の中に、真実に出会いたいという純粋な熱き思いがあったからだ、

私は解釈しています。

「この世のどこかに、真実はある、必ずある。」

何の取りえもない私ですが、この思いを心にかけてきた肉だったというのが、ただ一点のいいところになるでしょうか。

その実現を見ることなしに、肉は存在しなかったと確信している今、その思いだけが、愚かな私を引導してきたことを感じます。

その思いがあつたから、下らない肉であつても、何とか曲がりなりに、そして、大きなトラブルを起こすことなく、社会生活に馴染なじんできたのだと思います。

いいえ、それどころか、ただ我が道を行くことを許されていることを痛感して、肉としても、これほど幸せなことはないと、私は

常々感じているところです。

社会のため、会社のため、家族のため、そんな大そうな心意気など、何もない私ですが、自分の痕跡をしっかりと見詰め、自分のこれからを、しっかりと見つけていこうとすることに、エネルギーを注いでいることだけは確かです。

また、肉は、怖がりで臆病だけど、中は、しっかりしています。自分の理念というか哲学を持っています。だから、あまり人に、世間に、なびいていけないでしょう。

もともと、私には、自分で選び、自分で遂行していこうという思いがありました。それによって、自分に降りかかってくるものは、自分で対処していかなければならない、結局は、何事も自分のこと

は、自分以外に解決はできない、自分が納得しない限りダメだ、転生を重ねた結果、そのような思いを強くしていったのだと思います。自分の理念、哲学が、今世ようやくにして、自分の中で納得できるものと出会えたということで、私自身、大変喜んでいます。

今世、私達に本当のことを伝えてくれたのは、田池留吉氏という人でした。真実の世界から、田池留吉という肉を携えてたずさきてくれたことを心より感じ、本当に感謝しかありません。

私は、田池留吉氏の伝えてくれたことを、心で理解していると思っています。意識の世界の私達はひとつであることを、具体的に感じている、つまり、確信していることは事実です。

それは、肉は分ならずとも、意識は知っているという曖昧あいまいなもの

ではなく、「私達はひとつ」だという私の感覚は、私にとって、現実のものです。

だから、二五〇年後の出会いはずあり、しかも、その出会いがあつて、すべては、そこから始まっていくことも、私は知っています。今世の出会いも、非常に大きな喜びですが、来世の出会いは、それにも増して大いなる喜びであることも、もちろん感じています。そのような背景を抱えて、私は、田池留吉氏と接しています。私は、田池留吉氏を師と仰ぎ、鏡として自分の中に掲げる思いで、見ているではありません。そのような低次元で、田池留吉氏を見るということは、本当におこがましい限りだと思っています。私にとって、田池留吉という存在は、その程度に留まるものではないか

らです。

出合いは非常なる喜びです。ずっと探し続けてきたものを、単刀直入に端的に表現してくださいました。私の意識の世界に大いなる衝撃を与えていただいたのも、事実です。

そのことにより、私は、自分自身に目覚めさせていただきました。そして、今、自己確立の道を、淡々と歩んでいる幸せと喜びの中にあることを、確認しています。愚かな肉を携えながら、今、その道を一步一步、歩む喜びに、私の中は湧き返っていると思います。

確かに続いていくこれからの時間の中で、それは、さらにより鮮明に、自分の中で感じていくことができるだろうと確信しています。

まとめ

さて、ここまで、「意識の転回とは何か」から始まって、「その作業は難しい」「なぜか」という説明を経て、しかしながら、「それをしなければ、本当のことが分からない」「それをするために、私達は生まれて、そして、死んでいくという転生を繰り返してきた」といった事柄を、私自身の愚かさを交えながら、色々な角度から、語ってきました。

では、その難しい「意識の転回」は、どのようにすればできていくのかということが、皆さん、一番関心があることだと思えます。

しかし、残念ながら、手っ取り早い方法もなければ、裏技もありません。あるのは、ただひとつ、「心を見る」作業を丹念に繰り返していくことです。

この作業がない人には、「意識の転回」はできません。

なぜならば、「自分は肉」だとする土台を、信じて疑わない思いに、凝り固まっているからです。凝り固まっている以上、どうしようもありません。少なくとも、「心を見る」作業を真剣にやろうと思う人は、まだ今は、「自分は肉」だとする土台かもしれませんが、その土台が微かに揺らぎ始めているのだと思います。

そこで、「心を見る」作業というのを具体的に語ってみますと、自分を振り返って、反省すべきところは反省して、自分を正していく

ことが、「心を見る」作業ではありません。「心を見る」とは、その作業を通して、自分のエネルギーを感じていくことです。「私はエネルギーだ」ということを、実感していくことです。

まず、自分を産んでくれた母親に対して、どのような思いを広げてきたか、包み隠さずに、奇麗事に終わらないように、自分の思いをできる限り、出してみることから始めなければなりません。出してみるといっても、むやみやたらと、外に向けて出しても、無用なトラブルの元です。

つまり、自分の不平、不満、その他諸々の思いを、例えば、目の前にいる母親に向けて、直接に吐き出せば、まだその段階では、必ずトラブルが起こってきます。

互いに、「心を見る」作業をやつていこうとするならば、その中では理解されるかもしれませんが、それ以外では難しいです。無用なトラブルの收拾に時間とエネルギーを割くのは、得策ではありません。

とりあえずは、ノートに思いを書いてみる、書きなぐることをやってみることで。満点の母親など存在しません。そして、みんな母親には、自分の思いがストレートに出ているはずなのです。実際にやってみれば分かりますが、母親に使ってきた思いは、自分の周りの人達みんなに使ってきた思いなのです。だから、母親の反省です。セミナーに集われた人達は、このことを何年もやつてくれました。

それと並行して、それぞれの宗教遍歴を振り返ります。宗教遍歴という大げさなものなくても、例えば、誰でも、墓参りの一回や二回は、したことがあるでしょう。お墓の前で、または家の仏壇の前で、手を合わせて、どのような思いを出してこられましたか。あるいは、人によっては、太陽を見て拝み、そしてまた、夜空に輝く星に願いをかけてこられたかもしれません。

とにかく、祈ってきたことや、願いをかけてきたことや、パワーを求めてきたことがなかったか、占いや呪いましなに興じてこなかったか、それらを思い出します。そして、なぜ、そういうことをしてきたのかと、自分に聞けば、必ず何らかの理由が返ってくると思います。

「助けてほしかった」「救ってほしかった」「不思議な世界を知り

たかった」「自分の思い通りになってほしい」、そうならば、幸せになれると思うからこそ、自分の肉体を運び、時には、半端ではないお金を出してきたのです。そのあたりの自分の心の中の思いを、じっくりと見ていけば、どれだけ欲の皮が突っ張った自分であったのか、必ず自分で分かってくると思います。

何はともあれ、まず実践することです。

どんな時も、自分から出てくる思いを、自分の中で確認して、そして、ふっと丹田呼吸のひとつ、ふたつをして、目を閉じて、今、確認した思いに心を向けながら、「お母さん」と心の中で呼んでみてください。

「どうなる、ああなる、何を感じるか」は、ひとまず横に置いてお

いて、ただ、その作業を淡々と繰り返していくことが、極意と言え
ば極意であり、第一段階でしょう。

母親に使った心と、他力信仰に使った心を、丹念に、そして、あ
りのままに、自分の中で確認していくことをしていった時に、やが
て、ふと、「何で自分は生まれてきたのか」「自分とはいったい何だ
ろうか」「本当にこれでいいのか」と、改めて、そういうような様々
な思いが、心にどんどん過ぎります。それは、何度も今まで、思い
返してきたことかもしれませんが、ある時ふっと、そして、強烈に
自分に響いてくるのです。

チャンス到来とばかりに、自分の存在そのものが全く間違ってい
たことを、否が応でも知っていく現象が起こってきます。文中にも

記したように、それは、おそらく「人の生き死に」に関わってくる現象だと思います。そのチャンスをやまく活かすことができれば、それが第二段階となってくるでしょう。

本当に「心を見る」作業を、真剣にやってきた人は、そのあたりから、徐々に変わってくる兆しが見え出すのではないでしょうか。ほんの僅かかもしれませんが、それでも、その兆しが見え始めたというのは、自分の歴史の中で、大きな出来事です。

私自身も、拙著「ありがとう」の中で記しましたように、「人の生き死に」によつて、大きく方向転換を、自分自身に促しました。自分の計画だったと言えばそれまでですが、肉を本物とする思いの向きを変えるには、やはり、この現象において他にないと、私は思っ

ています。

真実は、自ずと自分の中から伝わってきます。自分の中には、間違はなく「本物の自分」、すなわち「真実」が実在するからです。

そして、その「本物の自分」が「偽物の自分」を引導していることに、心から気付くには、もう天変地異という手段しか残されていないことを、私は感じています。

最後に、締めくくりとして、少し、極端な表現をさせていただきます。私自身は、一向にオーバーだとも極端だとも思っていないませんが、やはり、核心に触れたい思いがあります。

心は、思いは、もうすでに地球を大きくとらえ、宇宙に飛んで
いつているように思います。

肉の時間の中で、肉と肉が生活している中で、なかなか、こうい
うことを、現実のものとして受け止めることは難しいですが、意識
の世界は、もうそのような段階なのです。いつまでも、肉の次元に
とらわれている思いとは、相容れないものなのです。

しかし、このことを全面的に出しても、今はまだ、殆ど^{ほとんど}の人は見
向きもしません。今の生活、今の家族、今の自分、それらが前面に
押し出されている状態の中では、無理というものです。

そうです、今の状態では無理です。だからこそ、これから様々な
事柄が、しかも、予期もしない事柄、想像を絶する事柄が起こって

くるのでしょうか。天変地異の嵐は、みんなに公平に平等に配分されていくのでしょうか。

形の世界の思いを遥かに超越した、まさに異次元から、それらが起こってくることを、今現在どれだけの人が、心で感じておられるのでしょうか。

止めることもできない、変えることもできない、その流れの中で、真実を知っていくシナリオがあると思います。

それを運命とか、宿命とかで片付けてしまっている場合もありますが、そもそも運命とかそういったものは存在しないと思います。すべてが自分で計画、予定してきた事柄であり、偶然ではないのです。運命に翻弄されたという表現も正しくはないと思います。

翻弄しているのは、自分であり、しかもそれが偽物の自分であることを知ることには困難です。何もかも運命のせいにしていくのです。言うなれば責任転嫁です。

運命は誰が決めるのか、天すなわち神でしょうか。しかし、そうではありません。また、運命を切り開いて、困難を克服して、ようやくつかんだ栄光の道、それもおかしいと思います。

何もかも、おかしい状態なのです。

おかしい状態だから、おかしい結果が、あちらこちらから噴き出てきます。それがこれからの時間に、特に顕著になってくるのでしょう。根本が違っていることの呼びかけが、声高らかになってくるということだと思います。

「真実はひとつ」、その呼び声高らかに、ともに歩んでいこうとする流れからのメッセージが、それぞれの意識の世界に響いていく日を、心待ちにしています。

肉の生活の中に、しっかりと腰を下して、根を張るのではなく、ただ、自分の意識の世界をしっかりと見るために、今、それぞれの環境の中に肉体を携^{たずさ}えていることを、知らなければなりません。

なぜ、生まれてきたのか、何をするために、この世に出てきたのか、その答えが自分の中で、はっきりとしてくるにつれて、自分が今、携^{たずさ}わっている仕事、自分の家族、自分の健康のこと、その他自分の周りの事柄に対しての自分の思いが、変わっていくでしょう。自分とそれらのものとの関わり具合に、変化が出てくると思います。

そうした時に、自分とはいかなる存在であるのか、はつきりと、自分の心で感じられる時が、やってくるでしょう。

これから、約三〇〇年かけて、私達は、必ず証明してまいります。私の意識の世界は、その途上にあることを確信しています。天の声、神の声、そのような、ちっぽけな世界ではないことを、今世の肉を通して、私は、私に伝えました。まさに、異次元より私自身に伝えられたことを、私はただ真つ直ぐに、遂行していくだけです。

今世は、その手始めだと記しました。今世を境にして、意識の世界は、大きく変わります。つまり、「意識の転回」を促す出来事が、どなたにもやってまいります。何を選び取っていくかは、それぞれ

です。

その猶予期間は、これから約三〇〇年です。その後、この地球が存続しているかどうか、それは定かではありません。

ただ、私達は、再び、この地球上に転生してくることはない、私自身に伝わってきます。その思いとともに、私は私の世界に帰っていくのだと、心で感じている今現在です。

「意識は永遠なり、私は喜びです」

意識の転回を、どうぞ、始めてください。

肉からの脱却のために、これからあることを感じていってください。

追伸

読まれてどうでしたでしょうか。

確かに、今、あなた自身、大きな節目を迎えていることを感じていただけましたでしょうか。

拙^{つたな}い表現ですが、私自身は、自分の思いをまとめさせていただくチャンスを得ましたことが喜びです。ありがとうございました。

さて、これから、「瞑想」ということが、非常に大切になってきます。瞑想でしか、真実の世界は伝えられないからです。意識の転回をし始めれば、あと残されたものは、瞑想だけだということが、

はつきりしてきます。

意識の転回が始まれば、正しい瞑想ができてくる、正しい瞑想ができてくれば、さらに意識の転回をしていく、そういうことではないでしょうか。私は、そのように感じています。

そこで、今年の終わりから来年初頭の時期に、正しい瞑想とは（仮題）のテーマで、本が一冊出版される予定です。

ともに、思いを向けていくことができれば、これ以上の喜びはないでしょう。日々、心を見ることを大切に、そして、瞑想を通して、喜びとともに味わっていきたいと思っています。それは、田池留吉氏が、私達に残してくれる大きな財産となるはずです。

塩川香世（しおかわかよ）

1959 年 3 月大阪市に生まれる。

1991 年 3 月税理士登録。

税務関係業務に従事、現在に至る。

著書／「ありがとう」意識の流れ姉妹編

「母なる宇宙とともに I」

「母なる宇宙とともに II」

「意識の転回」

2007 年 8 月 31 日 初版 第 1 刷 発行

著 者 —— 塩川香世

発 行 —— 株式会社 **かんぼうサービス**

発売元 —— 株式会社 **かんぼう**

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号 (〒550-0002)

電話 (06)6443-2171 FAX (06)6443-2175

印刷／製本……モリモト印刷株式会社

©Kayo Shiokawa Printed in Japan 2007

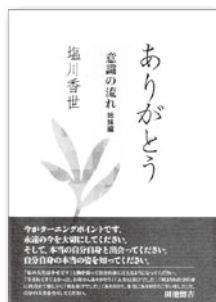
乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

波動で伝える真実の世界



意識の流れ [改訂版]
田池留吉 著
A5版 / 900円 (税込)

あなたは、今までにこの世のどこかに真実というものがあるのか、今はまだなにか分からないけれど、絶対に変わるのではない本当のこととあるのではないかと考えてみたことはないですか。
あなたは本当のことを知りたくはありませんか。



ありがとう
塩川香世 著
A5版 / 1,000円 (税込)

「私の人生は幸せです」と自分自身に言えるようになってください。
生まれてきてよかった」「人生は喜びでした」「何よりも自分自身に出会えて嬉しい」「死も喜びでした」「ありがとう、本当にありがとう」と、本当にありがとうごさいます」と、自分の人生を全うしてください。



母親のぬくもり
本田せつ子 著
A5版 / 1,000円 (税込)

近年、子供を取り巻く環境は狂っていると言います。その中で子供の問題も多発しています。最近、話題にのぼる自殺、いじめ、子供の犯罪、子供への虐待、学級崩壊、不登校など、子供を取り巻く環境は狂っていると言います。その中で子供の問題も多発しています。最近、話題にのぼる自殺、いじめ、子供の犯罪、子供への虐待、学級崩壊、不登校など、子供を取り巻く環境は狂っていると言います。



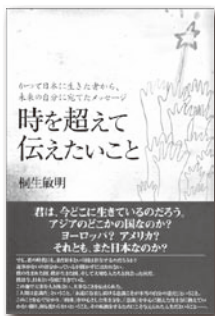
母なる宇宙とともに I
塩川香世 著
四六版 / 750円 (税込)

読み進めていくうちに、心にかが伝わっていくと思えます。それを私は波動だと言っています。
もつと言えは、母なる宇宙からの波動を感じていられると思います。何気ない題材を通して、私はその波動をお伝えしたいと思っています。



母なる宇宙とともに II
塩川香世 著
四六版 / 600円 (税込)

宇宙は遠くにあるのではなく、宇宙は自分分達の心の中にあるものです。宇宙とは、太陽系の惑星云々の形の世界ではなく、波動の世界なのだと思います。その宇宙とは、実は自分自身であり、私は宇宙そのものであり、宇宙とはエネルギーであると感じています。



時を超えて伝えたいこと
桐生敏明 著
四六版 / 900円 (税込)

君は、今ここに生きているのだらう。でも、君の時代にも、まだ日本という国は存在するのだらうか？ 返事がないのは分かっていて聞かずにはおれない。僕の生きた時代、そして大切な人たちと出会った国だ。この地で大事な人と出会って、大事なことを伝えられた。